

現代日本における「若者の成熟」の研究
—現場教員たちの目に映じた高校生たちの行動の分析から—

Understanding the Process of Becoming Matured of Adolescents in Contemporary Japan:
An Analysis of High School Students' Behavior Projected on Their Teachers' Eyes

平成24年3月

人材育成学会
『若者の成熟の現状と展望』研究プロジェクト

プロジェクトメンバー

(所属は平成23年4月1日時点)

座長	大泊 剛	株式会社人事工学研究所	所長
	南 隆男	慶應義塾大学 名誉教授、帝京大学	文学部教授
	国枝よしみ	大阪成蹊短期大学	観光学科 准教授
	石川孝子	東京工業大学大学院	イノベーションマネジメント研究科 助教
	桜井 創		
	内藤 淳	株式会社リクルート インフローソリューション事業部	組織行動研究所 主任研究員
	山田 香	株式会社リクルート インフローソリューション事業部	組織行動研究所 主任研究員
	伊藤真哉	学校法人 湘南学園	高等学校 教諭
	澤泉重一	富山県立大学	客員教授
	劉 東岳	プロメトリック株式会社	シニアマネージャー
	村山 陽	慶應義塾大学大学院	社会科学研究科 博士課程
	今村佳明	三菱電機株式会社	法務部
	松本大里	帝京大学	文学部 心理学科 学生
	本田一史	帝京大学	文学部 心理学科 学生
	三輪谷剛士	慶應義塾大学	文学部 人間科学専攻 学生
	黒岩公輔	東京都立 足立新田高等学校	教諭
	松本麦生	慶應義塾大学	文学部 人間科学専攻 学生
	石崎雅彦	三菱化学株式会社	人事部

1. はじめに

人材育成学会では、現代日本の若者に関わる諸問題の深刻化を踏まえ、『現代日本における若者の成熟の現状と展望』研究プロジェクト（以下プロジェクトと略記）を平成21年度に立ち上げ、3カ年計画で研究活動を行ってきた。現在の若者に関わる諸問題の根底に「未成熟」が存在するとの認識のもとに、「成熟と成熟の機序の本質」を明らかにすることによって、若者に関わる諸問題の改善・解決に貢献したいと考え、プロジェクトを進めてきたが、検討をすればするほど、この問題の大きさと複雑さを実感することとなった。本年度はプロジェクトの最終年度にあたる。そこで、これまでの研究結果を概観するとともに本年度の調査結果を報告し、併せて今後の研究の方向性について述べる。

2. 平成21年度（プロジェクト1年目）の研究の概要

現代日本の若者に関する問題状況を整理し、「成熟」に関わる先行研究を精査した。その上で、「成熟」の定義を行い、関係概念の整理を行った。以下に「成熟」の定義を示す。

○成熟の定義

「精神的に自立して他者と折り合いをつけながら安定的・継続的に社会生活を営める状態」

- ・精神的に自立するとは、自分のことは自分が責任をもって行い、結果を受け止める覚悟ができてきていること
- ・他者と折り合いをつけるとは、他者との間で生じる葛藤を自分と他者が納得できる状態で処理すること
- ・社会生活を営むとは、社会人として就労もしくは社会的支援の仕組みを活用して生活をすること

これらの研究結果についてはレポートにまとめ、平成22年3月27日の第17回人材育成学会研究会において報告した。

3. 平成22年度（プロジェクト2年目）の研究の概要

前年度の結果を踏まえ、実証研究に向けた検討を行った。本テーマについて行うべき調査・研究は多岐に亘ると予想されたが、高校全入時代を迎え、その5割強が大学・短大へと進学する状況において、成熟・未成熟の問題を広範囲に把握するためには、まず高校段階に焦点を当てるのが妥当であると考えた。そこで調査対象を高校生と担当教員に絞り、質問票調査案を作成する過程で、成熟と成熟に関わる諸要因及び成熟の機序についての議論を重ね、調査のフレームワークをまとめた。以下に、「成熟」の諸要因、及び「成熟の機序」に関わる仮説と概念図を示す。

仮説1：教師から見て高校生段階で成熟していると思われる生徒は以下の特徴を有しているだろう。

- ・自分の考えを自分の言葉で表現できる
- ・成長したいという意欲を持っている
- ・社会の動向に広く関心を持っている
- ・周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる
- ・自分の行動とその結果について責任を持つことができる
- ・自分とは考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる

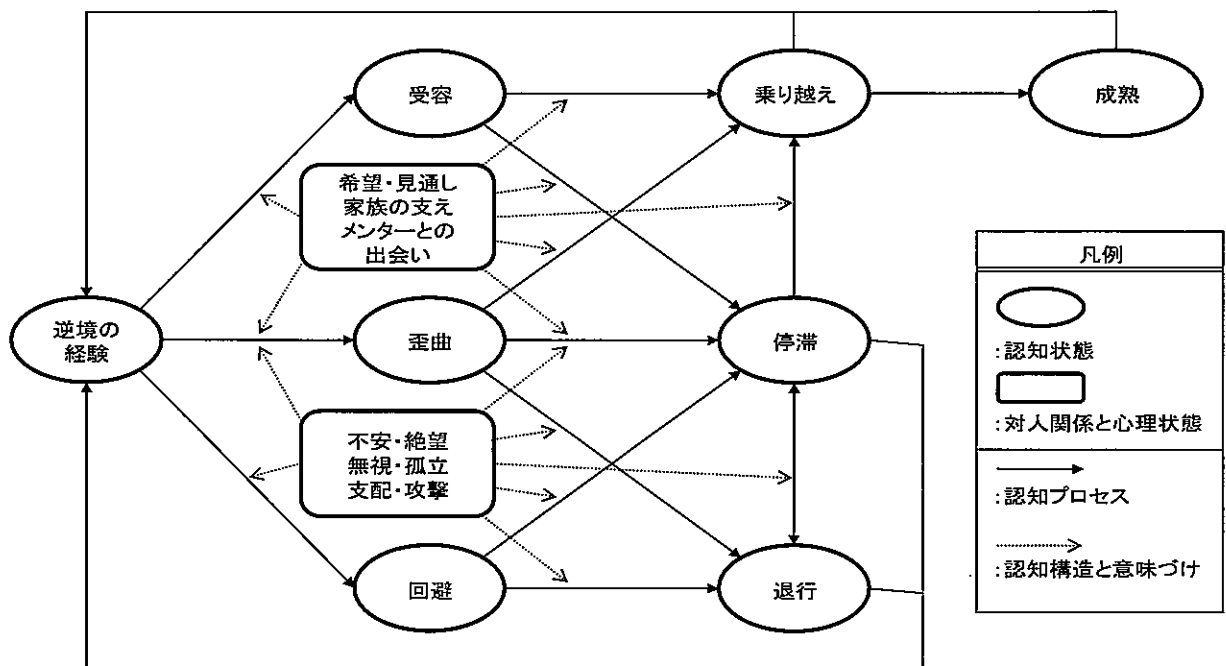
仮説2：逆境の経験をどのように受け止め意味づけるか（受け止め方/認知構造）によって成熟、停滞、退行に分岐していくだろう。

仮説3：受け止め方（認知構造）には、逆境経験や状況を自分のこととして受け止める「対峙」と逆境経験や状況を否認したり回避したりする「逃避」があり、本人の将来に対する希望や見通しの有無という心理状態及び本人を支える人間関係の有無が影響するだろう。

仮説4：学齢期及び社会人初期におけるそれぞれの発達課題を達成することが精神的成熟過程上の必要条件である。

(注)「発達課題」とは、それぞれの時期において遭遇する典型的な逆境（課題）を受け止

図表1 精神的成熟の内的プロセス



めて乗り越えるために必要な「心的構えと能力」をいう。

【用語の説明】

認知状態：逆境は岐路だけでなく本人に加えられる攻撃やネグレクトなどストレスの原因となる全ての事態を含む。認知状態は現実をありのままに受け止める（受容）、現実を自分の都合のよいように解釈して受け止める（歪曲）、現実から逃避する（回避）の3つに分岐すると考えられる。この3つの認知状態は更に、逆境を処理しストレスを解消する（乗り越え）、逆境を処理しきれずにストレス状態にとどまる（停滞）、更なる困難が襲いかかってきて自己の内面に閉じこもる（退行）に分岐すると考えられる。成熟は乗り越え経験の繰り返しを通して達成されると考えられる。

対人関係と心理状態：対人関係は発達心理学で言う「心の安全基地」ないし「心的安全空間」（小谷等2008）を形成できるレベルから一方的な攻撃やネグレクトの対象となって不信や憎悪を生みだすレベルまで広がっていると考えられる。一方、心理状態は将来への希望や見通しが持てる状態から、極度の不安や絶望状態まで広がっていると考

えられる。よい対人関係はよい心理状態を生み、悲惨な対人関係は希望のない心理状態を生んで、その人固有の認知構造を形成すると考えられる。

認知プロセス：ある認知状態から他の認知状態への移行過程（たとえば逆境の経験→受容→乗り越え、のような）を指す。

認知構造と意味づけ：対人関係と心理状態によって形成されたその人固有の認知構造は、認知プロセスにおいて、経験やことがらの意味づけに影響を与える。この認知構造は、たとえば肯定的な意味づけ方や否定的な意味づけ方に分けることができる。

これらの詳細については、平成23年5月15日の第21回人材育成学会研究会において報告した。

4. 平成23年度（プロジェクト3年目）の研究報告

4-1 未成熟から成熟に至る諸相と調査対象の絞り込み

4-1-1 未成熟から成熟に至る諸相

人は誰でも成熟願望を持っていると考えられる。それはあたかも水が高さから低きに向かうよ

うに流れていく。成熟をアマゾン川の本流にたとえれば、アマゾン川は膨大な水源と支流を持っているが、それは最終的に大河アマゾンに流れ込んでいく。しかし中には途中でせき止められ本流にたどり着かないで終わる流れや、蒸発したり地底に消えていったりする流れもあろう。それらの膨大な支流の有様は、後述するように、高校生段階での多様な成長のプロセスに似ている。どのような経路を辿ろうとも、最終的に成熟に至ることが期待される。

4-1-2 調査対象の絞り込み

精神分析的人格発達理論では高校時代を多様な役割実験の時期としているが、高校時代は成熟に向けて多様な課題が顕在化する時期であると考えられる。成人期に至る成長の過程では、いずれの年代においても順調に成長を遂げつつある人とそうでない人が存在する。その中で高校時代は、アイデンティティを確立する前段階であると同時に多様な進路選択の岐路に立たされることにより、成熟に向けた課題がより一層はつきりと深刻に降りかかってくると考えられる。言い換えれば、高校生段階において「成熟」に向けてもっとも多様な成長過程が出現すると予想される。また、先に述べたように高校全入時代を迎え、大学への進学率が50%強である現実を踏まえ、若年者を総体的に把握するためには高校生段階での調査が不可欠であると判断した。そこで、実証研究の第1ステップとして高校生に焦点を当て、まず高校教員の目を通した高校生の成熟に関わる現状を調査することとした。

調査のしやすさと、その後の展開可能性を考慮して、まずは、高校教員を対象としたWEB調査によって、「高校生段階での成熟」に関わる諸要因の明確化と外的評価尺度（教員による生徒の成熟度の評価尺度）の作成を目指すこととした。

4-2 調査の概要

4-2-1 調査の目的

調査の目的は、以下の3項目にまとめることができる。

①高校教員の目を通して「高校生として十分に成

熟している（以下成熟と略記）生徒」と「高校生として成熟していない生徒（以下未成熟と略記）」の特徴を析出する。

- ②高校生段階での成熟度を評価する外的評価尺度（高校教員による評価尺度）を作成する。
- ③高校生の成熟を効果的に促進させる方途の案出に向けて、高校生への調査実施のための基礎データを整備する。

4-2-2 調査の対象

職業：高等学校及び高等専門学校の教員・講師
年齢：23～64歳

地域：関東（茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川）

関西（滋賀・大阪・京都・奈良・兵庫・和歌山）

4-2-3 調査の方法

WEBによる質問票調査で、自由回答方式と5件法による回答方式の併用

質問票については別紙で添付

- ・質問票の間1～間9：自由回答方式
- ・質問票の間10：「成熟が感じられる生徒のイニシャル」と「性別」を想起してもらった後で、生徒の振る舞いに関する30項目（以下30項目と略期）について、「非常に当てはまる」から「当てはまらない」までの5件法で回答を求めた。
- ・質問票の間11：「成熟が感じられない生徒のイニシャル」と「性別」を想起してもらった後で、30項目について、「非常に当てはまる」から「当てはまらない」までの5件法で回答を求めた。
- ・質問票の間12：教員が考える「高校生の成熟にとっての重要度（以下成熟重要度と略記）」を30項目について、「非常に重要」から「重要でない」までの5件法で回答を求めた。

4-2-4 調査の時期

平成23年11月18日～11月24日

4-2-5 回収結果

総数334名（高校教員295名、高等専門学校教員10名、不明29名）

4-3 分析結果

334名の回答があったが、今回の報告では高校教員295名に絞り、回答データに不備があった7名を除き288名について分析を行った。

4-3-1 成熟している生徒と成熟していない生徒の違い

問10「成熟している生徒（以下「成熟群」と略記）」と問11「未成熟な生徒（以下「未成熟群」と略記）」の違い（平均値の差）を比較検討した。結果として、30項目のうち「29 異性の交際相手がいる（文頭の番号は質問番号、以下同様）」以外の29項目について有意な差が見出された。そのうち28項目は成熟群が未成熟群より有意に高く、

図表2 「成熟群」と「未成熟群」の違い



「7 アルバイトをしている」のみ未成熟群が成熟群より有意に高かった。とくに平均値差が大きい項目を網かけで示したが、「4 周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる」、「5 自分の行動とその結果について責任を持つことができる」、「12 授業をきちんと聴こうとする」、「21 定期試験の勉強に一所懸命取り組もうとする」、「24 校則や社会的なルールを守って行動ができる」、の5項目である。これらの項目は、因子分析

の項で詳しく触れるが、項目4と5が「社会的自己実現性因子」に、12と21が「勤勉性因子」に、24が「規律性因子」に含まれる。

4-3-2 高校生の成熟にとって重要な要因

図表3に、30項目を、先生が考える「高校生の成熟にとっての重要度」の得点の高い項目から降順で示した。このうち上位5項目「5 自分の行動とその結果について責任を持つことができる」、

図表3 先生が考える「高校生の成熟にとって重要な要因（降順）」



「28 自分と考え方の違う他者の存在を客観的に受け止めることができる」、「11 自分の考えを自分の言葉で表現できる」、「4 周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる」、「8 成長したいという意欲を持っている」が、前に述べた仮説1の項目と合致していた。プロジェクトが考え

た「高校生の成熟にとって重要な要因」と教員への調査のその結果が高い確度で一致したということである。

4-3-3 成熟重要度の尺度作成と各変数の検定

①成熟重要度の因子分析

図表4 成熟重要度の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
5 自分の行動とその結果について責任を持つことができる	.699	-.165	-.206	-.013	.265
11 自分の考えを自分のことばで表現できる	.694	.180	.059	-.095	-.064
28 自分と考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる	.667	.034	.001	.176	-.212
19 高校卒業後の進路に関して自分なりの目標を持っている	.549	.226	-.082	-.004	-.055
8 成長したいという意欲を持っている	.547	.005	-.029	.069	.072
4 周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる	.517	.085	-.113	-.135	.480
10 社会の動向に広く関心を持っている	.467	.172	.271	-.048	-.149
22 信頼しあえる友人がいる	.437	-.230	.144	.223	.247
12 授業をきちんと聴こうとする	.033	.798	-.191	.113	-.008
26 予習・復習をして授業に臨もうとする	.005	.767	.051	.107	-.063
21 定期試験の勉強に一所懸命取り組もうとする	.153	.745	-.100	.024	-.014
3 分からなかった内容は授業後に個別に質問をしにくる	.044	.551	.170	-.156	.258
24 校則や社会的なルールを守って行動ができる	.104	.371	-.123	.357	.079
29 異性の交際相手がいる	.052	-.359	.820	.020	-.081
30 友だちや後輩などに勉強を教えてあげる	.103	.151	.572	.130	-.142
15 違反行為を見かけた場合は、その状況を教員に伝えようとする	-.177	.196	.518	.006	.166
7 アルバイトをしている	-.199	-.069	.514	-.104	.136
14 身だしなみやおしゃれに気をつけている	.181	.098	.445	-.212	.087
27 ボランティア活動に主体的に参加しようとする	-.018	.169	.428	.244	.077
9 各種検定や校外模試などに主体的にチャレンジする	-.074	.323	.401	.065	.094
25 学校行事に前向きに取り組もうとする	-.101	.158	-.120	.772	.124
16 クラス内の仕事や役割を率先して引き受けようとする	.000	.066	.019	.666	.083
18 縁の下の力持ちのような目立たない役割でも着実に遂行できる	.255	-.051	-.010	.654	-.014
23 下級生に対して優しく接することができる	.169	-.024	.207	.360	.250
2 クラブ活動に休むことなく参加し続けようとする	-.106	.030	-.058	.319	.618
1 校内ですれ違う大人には、見慣れぬ相手でもあいさつができる	-.013	-.060	.168	.131	.555
13 上級生の指導に素直に従うことができる	.026	.234	.146	-.043	.420
因子相関行列	I	II	III	IV	V
I	—	.559	.233	.545	.508
II		—	.515	.632	.569
III			—	.518	.373
IV				—	.532
V					—

図表5 成熟重要度因子の下位尺度相関と平均、標準偏差 (SD)、 α 係数

	社会的自己実現	勤勉性	自己顕示	集団行動	規律性	平均	SD	α
社会的自己実現	—	.639**	.341**	.624**	.515**	4.11	0.61	.85
勤勉性		—	.532**	.692**	.617**	3.85	0.78	.87
自己顕示			—	.538**	.513**	2.56	0.64	.79
集団行動				—	.664**	3.63	0.76	.84
規律性					—	3.56	0.79	.72
						* $p < .05$ ** $p < .01$		

問12の回答結果に対して、回答データに不備が見られた7名を除く288名に対し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量 (.35以上)、固有値の変化及びスクリープロットを考慮して、5因子構造が妥当であると判断した。5因子構造を仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量 (.35以上) を示さなかった項目を除外し、残りの27項目に対して再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

因子の構造は以下のものであった。第1因子は8項目で構成されており、自己主張や自己目標及び他者の受容に関する項目が高い負荷量を示す。そこで「社会的自己実現性」因子と命名。第2因子は5項目で構成され、予習・復習や授業など学校の勉強に関する項目が高い負荷量を示す。そこで「勤勉性」因子と命名。第3因子は7項目で構成され、異性や友人との関わり、アルバイト、ボランティアなど学校以外の社会的な活動への参加を顕示する項目が高い負荷量を示す。そこで「自己顕示性」因子と命名。第4因子は4項目で構成され、学校行事への参加やクラス内の役割や仕事などを表す項目が高い負荷量を示す。そこで「集団行動」因子と命名。第5因子は3項目で構成され、クラブ活動参加や挨拶といった学校のルールに関する項目が高い負荷量を示す。そこで「規律性」因子と命名。なお第1因子には、前述の「仮説1」の6項目がすべて含まれている。

②成熟重要度の尺度作成

成熟重要度の因子分析結果をもとに、5つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、それぞれ「社会的自己実現性得点」、「勤勉性得点」、「自

図表6 成熟群と未成熟群の違い
(成熟重要度の5因子に準じた比較)

	未成熟群		成熟群		t値
	平均	SD	平均	SD	
社会的自己実現	2.00	0.64	3.85	0.80	30.90**
勤勉性	1.80	0.74	3.89	0.91	27.77**
自己顕示	1.89	0.80	2.79	0.65	16.39**
集団行動	1.83	0.77	3.79	0.89	26.55**
規律性	2.14	0.91	3.78	0.94	21.16**
					* $p < .05$ ** $p < .01$

己顕示性得点」、「集団行動得点」、「規律性得点」とした。各下位尺度の内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。その結果それぞれの下位尺度で .60以上の α 係数の値が示され、各尺度の信頼性が確認された。さらに下位尺度間の相関を算出したところ、5つの下位尺度間には有意な正の相関が示された。

5因子のうち、第1因子の「社会的自己実現性」と命名された因子は、成熟群と未成熟群の項目平均値の比較(後述)、「仮説1」の6項目との一致度、自由回答データにおける成熟した生徒の特徴との一致度(後述)から判断して、成熟の核というべき因子であると考えられる。

③成熟群と未成熟群の比較

成熟重要度の5つの下位尺度について、成熟群/未成熟群の各得点を比較した。成熟群と未成熟群との間に得点差がないかを検討するために、それぞれの下位尺度得点についてt検定を行った。その結果全ての得点において、未成熟群より成熟群のほうが有意に高いことが示された。なお、成熟重要度因子得点の比較では、「社会的自己実現性」因子得点4.11、「勤勉性」因子得点3.65で前者が0.46高いのに対して、成熟群では「社会的自己実現性」得点3.86、「勤勉性」得点3.89と後者がわ

ずかながら上回った。この違いは、成熟重要度が、教員が内面で考えて判断した結果であるのに対して、成熟群が実際の生徒を観察して判断した結果であることによるものと思われる。すなわち「社会的自己実現性」の各項目が外部からの観察では見えにくいものに対して、「勤勉性」の各項目は外部からの観察で相対的に見えやすかったためと思われる。

4-3-4 自由回答データの分析結果

自由回答データの分析は、個別の文章データを読み込んで、5件法の回答形式を用いた30項目の質問内容を用いて分類する方法（30フレーム）と新しい分類概念を設定して分類する方法を併用した。

いずれも個別の回答データと分類概念のマトリックスを作成し、個別データと該当する分類概念の交差するセルに1を与えて分類概念ごとに件数をカウントし、その分類結果から読み取れる内容をまとめた。ただしWEB上で回答された文章データのため、文章の量、記述内容の具体性に大きな差があるとともに、分類のくくり方いかんではデータ件数が変化する可能性がある。そこで、分類の件数は参考程度にとどめ、文章全体から設問ごとの回答傾向と本質的な特徴を抽出するように努めた。

なお、設問の趣旨とは異なる回答や「わかりません」という回答が5~8%程度見られたが、これらは分析から除外した。

以下、設問ごとに読み取り・意味解釈した内容を要約にまとめる。

①成熟している生徒と成熟していない生徒では、何が違うか

i 成熟している生徒の特徴

成熟している生徒の特徴は、このまま社会に出ても立派に通用するだろうと思えるほどの成熟度のレベルの高さと特徴の収斂性である。

全体の回答の3分の1は30フレームの項目に、残りの3分の2は30フレーム以外の項目に分類された。30フレームの中では、「社会的自己実現性」

因子に大半が集中し、一部は「勤勉性」因子に分類された。この結果は「仮説1」の検証結果を補強するものであろう。30フレーム以外では、「自分の考えで行動できる（自律性）」と「人の立場・気持ちの理解、思いやり」が双璧で、そのほかの項目としては「自己制御・落ち着き」などが特徴的である。

全体をまとめれば、「自分をしっかり持っており、周囲に発信できる」、「他者を理解し思いやることできる」、「自己制御でき落ち着いている」となった。なお項目数は多くないが「親や家庭環境がしっかりしている」という項目も見られ家庭環境の好影響も見て取れた。

ii 成熟していない生徒の特徴

未成熟群に際立つ特徴は、成長段階におけるレベルの低さと特徴の広がりである。高校教師から見た未成熟な生徒の中には小学校低学年レベルと評されるケースも見られた。

未成熟の特徴は、ほとんど30フレームに収まらず、30フレーム以外に設定した概念による項目数は成熟群で設定した項目数の5倍に達した。これらの項目をより大きなカテゴリーにまとめたが、そのカテゴリーは、幼児性・子供じみた行動、情緒不安定・思考の混乱、偏った認知構造、自己中心的傾向、低言語化（低コミュニケーション）能力、思いつきや情動による言動、他者否定的傾向、自己認知能力の欠如、生活の乱れ、責任感の未形成、受動的傾向、本業（勉強）回避、自己の問題認識能力の欠如、勤勉性の未形成、非受容的傾向、他者への依存・甘えであった。これらをさらにまとめると、幼稚で自己中心的・わがまま、低能力・能力の未発達、基本的生活習慣・学習習慣の未形成、規範意識の未形成、他者への無関心・思いやりの欠如、他者への過度な依存・甘えなどであった。他に外部環境要因を指摘する回答も見られたが、これらは未成熟の特徴をもたらした原因というべきであろう。

iii 成熟群と未成熟群の比較

以上の結果は図表7のようにまとめることができよう。

図表7 成熟群と未成熟群の特徴のまとめ

比較の次元	成熟群の特徴	未成熟群の特徴
自己	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がある ・自分の考えを自分の言葉で表現できる ・自分を客観的にとらえられる、自分の立場を理解できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・人に頼る行動、依存、甘え ・挨拶ができない、敬語が使えない、自分の意見や気持ちをうまく表現できない ・一面的な思考しかできない
他者	<ul style="list-style-type: none"> ・他者のことを考慮できる、思いやれる ・自分と考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる ・周囲からのアドバイスをしっかり受け止める 	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の気持ちを推し量れない ・自己中心的な考え方や行動、わがまま ・教師の意見を受け入れない
制御	<ul style="list-style-type: none"> ・感情を制御できる ・規範に従う、常識がある ・我慢できる（欲求充足の先送りができる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちをコントロールできない ・規範意識が低い、ルールが守れない、マナーが悪い ・本能的な行動、今さえよければよい
未来（社会）	<ul style="list-style-type: none"> ・進路（将来）に対して自分なりの目標を持っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的意識に欠ける
結果としての状態	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いたしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神的にも行動的にも落ち着きがない

②未成熟から成熟への成長過程における諸相

前記4-1-1の「未成熟から成熟に至る諸相」でも述べたように、多様に展開する高校生の成長過程の有様を、質問票の該当する設問への自由回答結果を分析することにより明らかにすることを試みた。以下の分析結果は、高校生の未成熟から成熟に至る全ての有様を含むものではないが、「成長過程の多様性」を示唆しているものと考えられる。

i 先生の指導には良く従うが成熟は感じられない生徒の特徴

有効回答の1割を超えたのが、「自分から考えない・判断できない」と「主体的・自発的に行動することがない」の2項目であった。多くの教員は、本設問に対して「自主性のなさ」を挙げる傾向が強かったと言えるだろう。

集約結果からは「素直で表面的には従うが、自分から考えたり自己の意思にもとづいて行動したりしようとはせず、言われたことだけはやる」という生徒の姿が浮かび上がってくる。そのため、「行動が機械的だったり、マニュアルを求めたり

するばかりで、本質的なことはきちんと理解できていない」という状態に陥るのではないかと推察される。「自己主張をせずに、おとなしく目立たないようなタイプ＝自我萎縮型（仮称）」の生徒が多く当てはまるようだが、中には八方美人の世渡り上手として教員と接したり、自分中心の考え方をする者もいるようである。「指示されたことを実行すること」は成熟における「第1段階」として必要なことだと考えられるが、そんな姿勢に「自ら考え、行動すること」が伴わないと、成熟の「第2段階」に向かっているとは見なされていないようである。（この成熟の「第1段階」と「第2段階」については、後述のiv「一見問題がなさそうな生徒の成長プロセスにおける特徴」のところでより詳しく考察する。）

ii 友だちの数は多いが成熟は感じられない生徒の特徴

有効回答の1割を超えたのは「他者と深く関わらない・表面的なつきあいの1項目だけであった。多くの教員は本設問に対して「関係性の浅さ」を挙げる傾向が強かったと言えるだろう。

集約結果からは「誰とでも楽しく仲良くできるが、単なる遊び友達の関係であり、親友と呼べるような深い関わりは求めようとしない」という生徒の姿が想像できる。そのため、「趣味や興味が共通する同じようなタイプの生徒だけで集まることが多いが、葛藤と向き合う姿勢が希薄なため、何かトラブルがあるとともろくも崩れてしまうような不安定な関係性」に終始してしまうようである。この設問では、「自己主張をせずに、周囲に合わせ、流されるままのタイプ=自我萎縮型」の生徒と、「活発だが、軽薄で騒がしく、自己中心的で周囲に影響を与えるタイプ=自我肥大型（仮称）」の生徒の両方のタイプが存在するようである。「多くの人たちと協調すること」は成熟における「第1段階」として必要なことだと考えられるが、それだけで終わってしまい、「葛藤を乗り越えてでもお互いの本心でつきあえる関係」が築けないままだと、成熟の「第2段階」には向かっていかないと思われる。

iii 学業成績に問題はないが成熟が感じられない生徒の特徴

設問の性格から「学習態度・姿勢の欠如」に関する指摘が最も多かった。その指摘内容からすると、授業範囲外の学習領域や学校行事への無関心、応用力の欠如が見て取れる。次に指摘の多かったのが「コミュニケーション能力の欠如」だが、その半数近くが「人間関係を作るのが下手」であった。その他では「親・家庭の影響」、「親・教師の言いなり（自分がない）」、「甘やかされて育った」等の回答も多く、子供の教育と成熟における親・家庭の影響の大きさが改めて見て取れた。

回答結果からは、親・家庭の影響については、教師として関わりたくても関わるできない、もしくは関わることの難しさも感じ取れた。また「自主性の欠如」や「自律・自立していない」も目立った項目であるが、これら未成熟の原因については、今後明らかにしていかなければならない。（これらの回答結果から、学業成績に問題のない生徒の多くが人間的に未熟という印象を持ってはならない。先生がある特定の生徒を思い浮かべ特徴的な性向を回答しているのだから、そ

の範囲で解釈しなければならない。しかし、このようなタイプの生徒が従来に比べて増えているかどうかについては、今後先生方との意見交換などを通して検証していく必要がある。）この設問の回答から見てとれる、先生が生徒に期待しているものは、自律・自立、思考の柔軟さ、自分自身の相対化（自分自身を客観視する）、受験対策としての学習から本質的な意味で学習に取り組む姿勢への転換といったところのようである。

iv 一見問題がなさそうな生徒の成長プロセスにおける特徴

教師の指導には良く従う、友だちの数は多い、学業成績にとくに問題はない、けれども、成熟しているとは言えない生徒については、目立った問題がないがゆえに見落としてしまう可能性があるといえよう。

これらの生徒の特徴を図表8にまとめた。これらの析出結果は、先述の「仮説4」を検証する内容といえよう。

一方、後述するように「成熟していると思われた生徒が急に停滞、混乱、退行などの状況に陥ったきっかけ」の項でも述べるが、成熟には「第1段階の成熟（表面的な成熟）」と「第2段階の成熟（本質的な成熟）」があり、図表8のプラスの特徴は第1段階の成熟に必要な要件であるということができよう。

v 逆境があったからこそ成熟した生徒の特徴

このタイプに属する生徒は、内面的成熟に近い生徒から未成熟な生徒まで多様に広がっているが、先述した3タイプと比較して、成熟に近い生徒が多いようである。「卒業時の感謝の気持ちや態度」のように成熟したから獲得できた特徴か、成熟を促進した特徴かわからないものもある。環境面でも恵まれた生徒から恵まれない生徒まで様々である。

30フレームに関しては、成熟群と同様に成熟のコアというべき「社会的自己実現性」因子の項目に集中した。30フレーム以外の項目では成熟群と同様に「自分をしっかり持っており、周囲に発信できる」、「他者を理解し思いやることができる」、

図表8 成長過程における諸相を示す生徒の特徴のまとめ

生徒の態様	プラスの特徴	マイナスの特徴
教師の指導には良く従うが成熟が感じられない生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・指示されたことを実行することができる ・規範に従うことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体性がない ・自我が育っていない、規範が内面化していない
友だちの数は多いが成熟が感じられない生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広いつきあい ・多くの人たちと協調できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との表面的なつきあい ・他者との葛藤を乗り越えてでも本心で付き合える関係を築けていない
学業成績に問題はないが成熟が感じられない生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・言われたことや、きまりは守る ・真面目にコツコツと努力する 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的、自分さえよければよい ・受け身 ・人間関係が希薄

「自己制御でき落ち着いている」点は一致したが、これらより多くの回答が集中したのは「自分がすべきことを淡々とできる、努力家、粘り強い、あきらめない」、「芯が強い、精神的に強い」、「明るく、ポジティブに考えられる」などであった。逆境に対してあきらめず、努力する姿勢や精神的強さ及びポジティブな認知構造が見て取れる。これらの析出結果は「仮説3」を支持しているといえよう。

③ 生徒が遭遇する逆境と逆境への対処法

本設問は、先述した仮説2～4を検証する狙いで設定した設問であり、生徒が遭遇する逆境とそれへの対処法について尋ねた。

i 生徒が遭遇する逆境

本設問について、回答があった逆境の延べ件数は500件を越えた。それらを分類した概念の項目数は50を越えた。最も多かったのは家庭環境で、次いで入試・進路問題、交友関係上の問題、成績に関する問題、部活・クラス・行事に関する問題、その他となった。

それぞれの内容を見てみると、家庭環境の問題では家庭の経済状況の悪化・困窮、両親の離婚・失業、親の責任放棄、家庭崩壊などであった。入試・進路問題では進路決定の際思うとおりの成果が出ない、経済的理由で進学を断念、就職活動の不調などであった。交友関係上の問題では交友関係で思うようにならないことや恋愛関係などがあ

げられた。成績に関する問題では、成績の伸び悩み、成績不振、努力に見合った成果が出ないなどであった。部活・クラス・行事に関する問題では部活動で努力に見合う成果が得られなかったとする回答が最も多かった。他に、思うようにならないこと（とき）・理想と現実のギャップ、やりたくないことをやらなければならない、大学入試・競争環境・受験という回答も、合わせるとかなり大きな数になった。

これらは高校生という時期には誰もが遭遇する事態であるが、それを逆境と捉える生徒が多い（と教員が思っている）ということである。これらを大きくくりで見ると、家庭の経済状況の悪化など自分ではどうにもならない事態、自分の努力に見合う成果が得られない事態、誰もが遭遇する事態に分類することができよう。

回答の中には、高校生段階では逆境と呼べるほどのものはない、あるいは逆境があってもすぐ回避してしまうという指摘が5%程度の先生から寄せられたが、生徒が遭遇する事態を逆境と感ずるかどうかは本人の捉え方によるものと思われる。したがって、生徒にとって何が逆境かは、生徒自身に問う必要があり、プロジェクトの今後の課題である。また、かつては逆境といえるようなものではないことでも容易に躓く生徒の存在、逆境になる前に親が介入してしまう状況、生徒自身が困難なことを避けて葛藤を回避してしまうことなどについても、それらの問題状況を的確に把握するためには、生徒自身への調査が必要となる。

ii 逆境への生徒の対処法

本設問の回答は、先述の「逆境があったからこそ成熟した生徒の特徴」と符合している。困難に直面して苦勞しながらも様々に対応している様子が窺えた。対処を分類した結果、状況を受け止めて努力を続ける、粘り強い等が最も多く、具体的内容としては、腐らず自分の置かれた状況の中でできることをする、努力を怠らない、黙々と行う、粘り強い、忍耐を続ける中で受け入れる、などとなった。次に自分の努力で解決、自律的行動の内容では、周囲の人に相談したりアドバイスや支えを得て逆境に立ち向かう、問題を解決する、状況を自分のこととしてとらえ自ら改善しようと努力したなどとなった。次に意思・ポジティブな認知構造の内容では、プラス思考、前向きな姿勢と取り組み、自分で乗り越える意志の強さ、逆境を避けない、課題に正面から向き合うなどとなった。

他の様々な対処法では、夢や目標を持つ、失敗を恐れずに進む、挑戦し続けるなど目標を持って挑戦する、進学をあきらめ前向きに就職活動に取り組むなど発想の転換、素直にアドバイスに耳を傾けたり、他人に助けを依頼したりする、教師の指導を受け入れ理解する姿勢があるなど他者を受け入れる姿勢、うろたえない、沈着冷静、計画的行動など能力・コンピテンシーの高さなどがあげられた。

本人の対応・対処ではないが、教師が話を聴く、教師の励ましなどの教師側の努力や、周りにサポートしてくれる人や励ましてくれる友人がいるなど支援者の存在、カウンセリングなどの組織対応等の回答もみられた。

以上をまとめると逆境を避けることなく受け止めて自力で対処するか、他者の支援を得るにしても依存的ではなく自分をしっかり保持している印象がある。逆境なくして成熟なしという意見があったが、逆境に真摯に向き合うことが成熟に向けての欠かせないプロセスといえそうである。これらの析出結果及び先述の「逆境があったからこそ成熟した生徒の特徴」の析出結果から、「仮説2」と「仮説3」の一部（逆境→受容→乗り越え）は確認されたといえよう。

④ 生徒の成熟に関わる変化のきっかけ

先述した「仮説2～4」から判断して、成熟していると思われた生徒が大きな逆境に遭遇して停滞・混乱・退行の状況に陥ったり、逆に未成熟と思われた生徒が一気に成長したりするケースの可能性が想定された。そこで以下の設問を設定して変化のきっかけを明らかにし、成熟の機序の検証を行うとともに成熟促進の手がかりを得ようと試みた。

i 成熟していると思われた生徒が急に停滞、混乱、退行などの状況に陥ったきっかけ

家庭環境や悪い友人、経済状況など、環境要因が整っていないと、成熟のためのベースが不安定になる。これは拠って立つ共同体(コミュニティ)の脆弱化の影響と言い換えることができるかもしれない。しかし、一見問題がなさそうな、普通の生徒でもふとしたきっかけ(ゆらぎ)で混乱、停滞などの状態に陥りやすい。そのきっかけとは、友人関係の躓き、成績が伸びない、自分が思ったように物事がうまくいかない、クラブ活動でうまくいかない、自身のけが・病気などである。

これまで「表面的な成熟」と「本質的な成熟」という議論をしてきたが、ゆらぎを経験していなかったり、表面的に済ましたりしてしまうと「表面的に成熟」してみえるのではないかと考えられる。ふとしたことで起こるゆらぎによって、自分自身について向き合って、自分自身についての理解や社会(自分を取り巻く環境・周囲の人)に対する理解を深めることで、折り合いをつけたり、目標を定めたり、友人と良好な関係を築いたりすることができるようになっていくのではないかと考えられる。表面的な成熟を見せる生徒にありがちな自分に対する万能感の世界(先述した自我肥大型の認知)から自己客観視ができる世界(等身大の自分)にアジャストしていくと考えられる。ゆらぎが乗り越えられないと本質的な成熟に至らず、うまくやっつけていけている間は特に問題にならないが、ふとしたきっかけですぐに躓いてしまう。以上からは、「仮説3」の一部(逆境経験→歪曲・回避→停滞・退行)が確認されたといえよう。

ii 成熟をしていないと思われた生徒が急に成長したきっかけ

成熟をしていないと思われた生徒が急に成長したと感じられたそのきっかけは、分類項目数で92、それらをまとめたカテゴリー数では15となった。最も項目数の多かったカテゴリーは「成功体験、他者からの承認、自信」である。その具体的内容は「成功体験」が最も多く、次いで「自分に自信が持てたとき」、「自分が他者から認められ・評価されたとき」となった。次に項目数の多いカテゴリーは「将来・目標を考えた」である。その具体的内容は「将来の目標や進路が決まったとき」が最も多く、次いで「就職や将来のことを考えないといけないと気づいた・覚悟を決めた」、「やりたい事・夢が見つかった」などである。カテゴリー別にみると、上記の2カテゴリーに続いて、「交友関係」、「家族関係」、「その他」、「失敗体験」と続く。一方、「交友関係」、「家族関係」、「人間関係」、「教師の指導」、「メンターとの出会い」というカテゴリーを人間関係でまとめると、その項目数は「成功体験、他者からの承認、自信」とほぼ匹敵し、人間関係が生徒の成長に及ぼす影響の大きさと重要性が窺える。他のカテゴリーでは、「大きな出来事や困難な経験」、「部活動」、「アルバイト・旅行・社会経験等」、「自分と向き合う」などとなった。これらとは別に、「特になし」という回答や「その他」としてまとめたカテゴリーの中に、「歳をとると(学年が上がると)成長する(自律的成長)」という回答もみられた。これらからは、教員による生徒の成長のきっかけに対する捉え方の多様性が見て取れる。

以上の回答結果をまとめると、様々な出来事(経験)をきっかけとして本人が認識を改め行動を起こし、成功体験や失敗体験をしながら自信をつけたり、目標を見つけたり、視野を広げたりしていく様子が見て取れる。そして、それらの過程で周囲の人たちが果たしている役割は、生徒の成長の支えであると同時に、生徒との関係性そのものが生徒にとって体験する出来事(ポジティブ、ネガティブ両面で)となっている。言い換えれば、何らかの出来事をきっかけとして本人の認知と行動が変化して成長していく。そして本人の自律的成

長を支え促進するのが人間関係であるということができよう。

⑤ 析出結果のまとめ

以上述べてきたように、当初プロジェクトが想定した、高校生段階での「成熟の主要因」並びに「成熟の機序」についての仮説は、高校教員の目を通した質問票調査の析出結果によって一定に検証されたということが出来る。すなわち、「成長プロセスの有様」は極めて多様な未成熟の状態(成長レベル及び未成熟の特徴の広がり)から出発して、多様な成長プロセスを経て高校生段階での成熟に至るということである。その多様な成長プロセスにおいて、高校生本人は様々な「逆境」を経験し、その受け止め方、対処の仕方によって「乗り越え」「回避」「退行」に分岐していく、そしてそれに影響を与えるのが本人を取り巻く人間関係であるということである。さらには、高校生段階の成熟には、「第1段階の成熟」(高校生段階での発達課題の一部を達成した状態)と「第2段階の成熟」(本質的な意味での成熟)があるであろうということも示唆された。この「本質的な成熟」の核となるのが、当初プロジェクトが設定し、「成熟重要度の因子分析」で抽出され、自由回答データでも確認された「社会的自己実現性」因子である可能性が高い。この因子で示された特性を獲得することによって、大きな逆境に遭遇しても乗り越えて行けるであろうことが期待される。

一方、今回検証された仮説はたとえて言えば、成熟及び成熟の機序に関するフレームワーク(大枠)としての仮説であり、調査研究の成果を実践・応用に結びつけていくためには、より詳しい調査・研究が必要になる。具体的には、未成熟から成熟に至る多様な成長過程における諸相はどのようなタイプがどの程度の割合で分布しており、どのようなプロセスを経て成熟に至るのか、高校生本人は逆境をどのように受け止め、考え、感じ、行動しているのか、本人にとっては制御できない原因で逆境に直面したときの有効な対処方法(本人自身および周囲の支援)等々、検討すべき事項は数多くある。その中で当プロジェクトとして優先的に取り組むべきものが何かについては、調査に協

力してくれた高校教員の方々の意見も参考にしながら検討してまいりたい。

そこで今後のプロジェクトの課題として、高校生本人を対象とした調査研究を進めていく上で基本となる仮説の設定をしておこうと考えた。以下、その仮説について述べる。

⑥ 新たに設定した仮説

今回の質問票調査の析出結果を踏まえ、今後、高校生本人への調査の実施を想定して、プロジェクトは新たに次のように仮説を設定した。それらは、①成熟の背景にあるもの、②成熟に必要な能力、③成熟に必要なプロセス、④結果としての特性、の4点にまとめることができよう。以下順に述べる。

i 成熟の背景にあるもの

- ・成熟した生徒は基本的に他者を信頼することができるが、未成熟な生徒は他者を信頼することができない
- ・成熟した生徒は基本的に自分を信頼することができるが、未成熟な生徒は自分を信頼することができない
- ・成熟した生徒は基本的に社会を信頼することができるが、未成熟な生徒は社会を信頼することができない

信頼感の有無を生じさせている主要な原因として、それまでの成長の過程でしっかりした共同体に支えられてきたかどうかの違いがあると思われる。

ii 成熟に必要な能力

- ・成熟した生徒は自己の欲求充足を先送りすることができるが、未成熟な生徒は刹那的衝動的な行動をする
 - ・成熟した生徒は自己の感情をコントロールすることができるが、未成熟な生徒はすぐにきれた感情の行動をする
 - ・成熟した生徒は自己や周囲を客観的にとらえることができるが、未成熟な生徒は、自分中心又は依存的である
- これらの能力には家庭におけるしつけや年齢的

な成長が大きな影響を与えている可能性がある。

iii 成熟に必要なプロセス

【第1段階】

- ・言われたことや規則は守ることができる（規範の受容）が、主体性が弱い
- ・まじめにコツコツと努力をする（勤勉性の基礎）が、目標観や目的意識に乏しい
- ・自我は形成されつつあり他者と協調しようとするが、自己中心性（肥大した自己）、自信の無さ（他者への依存）、他者と深く関わらないなどの傾向が見られる

上記のポジティブな側面は、高校生段階までに身につけておくべき必須課題であるといえよう。

【第2段階】

- ・規範が内面化（自分自身で意味づける）し自律的に行動できる
- ・ありのままの自己（等身大の自分）を受容することができる
- ・自分とは異なる考え方・行動をする他者を客観的に受け止めることができる
- ・将来への展望、目標をもつ

以上の核となるのが、「社会的自己実現性」である。

iv 結果としての特性

- ・落ち着いており少々のことに動じない、困難を直視できる
- ・自分の考えを表現することができる、他者の支援を得たり良い関係を形成したりできる
- ・自分で考えて主体的に行動することができる、困難に遭遇したとき自分のこととして対処できる

5. 今後の課題

高校生段階での成熟に関わる要因及び状況について、高校教員の目を通した評価（質問に対する回答）を通して見てきた。その結果、プロジェクトが当初設定した「仮説」はほぼ検証されたとい

えるが、今後は高校生本人が逆境をどのように受け止め、感じ、考え、行動しているか、その結果どのような事態に至ったか、また高校生本人の人格特性や本人を取り巻く環境要因はどのように関わり影響を与えているかを調査・析出することが、成熟と成熟の機序の本質を明らかにし、効果的な成熟促進の方途を確認し案出する上で不可欠であると思われる。

今回の調査では回答を寄せてくれた高校教員の

過半数が逆境の内容として家庭環境を上げた。これらは家庭の経済状況や環境の急変など、本人の責任ではないことに由来するものも多い。さらにこれらについて学校の教員が介入することはほとんど不可能といえる。そのような中でどうしたら生徒の成熟を促すことができるかについて、これまで以上に真剣な検討がなされなければならない。当プロジェクトは今後も研究活動を継続し、有効な手がかりの発見を目指していこうと思う。

参 考 資 料

【調査票】

高等学校並びに高等専門学校教員の皆様へ
～質問票調査へのご協力のお願い～

人材育成学会 『若者の成熟の現状と展望』研究プロジェクト
座長 ^{おおどまり たけし}大泊 剛 (人材育成学会副会長)

私ども人材育成学会では、2002年12月の設立当初から、現代日本の若者に関する諸問題の深刻さと広がり
りに注意を払い、学会主催の研究会などで若者に関するテーマを取り上げてまいりました。しかし若者
を取り巻く状況はますます厳しさを増し（日本人全体にとっても厳しさを増していますがとりわけ若者に
とって）、若者に関する諸問題（早期離職傾向、引きこもり・ニートの社会問題化、メンタル不全者の増加、
若年層の自殺率の悪化等々）は深刻さを増しています。

これらの諸問題に対して様々な分野の方々がそれぞれの持ち場で必死の努力をしておられますが、対
症療法感が否めず深刻な事態が続いております。そのような中で、当学会では諸問題の根底には「若
者の未成熟」が関わっていると考え『現代日本における「若者の成熟の現状と展望」研究プロジェクト』
を立ち上げ、3年間にわたり各分野の専門家とのディスカッション及び先行研究の精査を進めてまいり
ました。

当研究プロジェクトでは、「成熟」とそれに関する要因について仮の定義を行い、実証研究の準備を進め
ております。「成熟」に関する要因と機序がある程度解明できれば、若者の成熟の促進に役立てていただ
くべく、学会として研究成果を広く社会に公開してまいりたいと考えております。つきましては、本質問
票調査実施の趣旨をご理解の上ご協力を頂きたいようお願い申し上げます。

なお、質問票には、当研究プロジェクトが設定した「成熟」の定義（仮）をお読みいただき、高校生
の段階を「将来的な成熟に至る成長の過程（順調な成長、停滞や混乱、さらには退行もありえます）」と
捉え、先生の目に映った実態としての高校生の特徴についてお答え下さい。

【当研究プロジェクトが考える「成熟」の定義】

「精神的に自立して他者と折り合いをつけながら安定的・継続的に社会生活を営める状態」

「精神的に自立する」とは、自分のことは自分が責任をもって行い、結果を受け止める覚悟ができてい
ること

「他者と折り合いをつける」とは、他者との間で生じる葛藤を自分と他者が納得できる状態で処理す
ること

「社会生活を営む」とは、社会人として就労もしくは社会的支援の仕組みを活用して生活すること

以下の設問1～設問3は対象者選定のための質問です。設問1～3にお答えの上、質問票調査対象の方は1
～15の質問にお答えください。

設問1. あなたのお勤め先の業種について、最もあてはまる（一番近い）ものを以下の中からお知らせ
ください。（設問1の回答= ）

- 1 農林漁業・鉱業
- 2 建設業
- 3 電気機械器具製造業（情報通信電機）
- 4 輸送用機械器具製造業（自動車など）
- 5 機械製造・材料系製造業（その他機械、化学、金属など）
- 6 その他の製造業（食料品、繊維、出版など）
- 7 電気・ガス・熱供給・水道業
- 8 運輸業
- 9 通信業（電話、電気通信）
- 10 卸売業・商社
- 11 小売業
- 12 飲食店
- 13 金融業（銀行、保険、証券）
- 14 不動産業
- 15 情報サービス業
- 16 調査・販促・広告業
- 17 その他のサービス業
- 18 医療・保健・福祉
- 19 教育、学習支援業 ← 対象者
- 20 中央官庁・地方公共団体
- 21 その他

<設問1=19の回答者の方のみお答えください>

設問2. あなたのお勤め先（派遣先）について、「教育、学習支援業」とお答えの方にお伺いします。
あなたのお勤め先（派遣先）について、業種小区分をお知らせください。（設問2の回答＝ ）

【学校教育】

- 1 幼稚園
- 2 小学校
- 3 中学校
- 4 高等学校、中等教育学校 ← 対象者
- 5 特別支援学校
- 6 大学
- 7 短期大学
- 8 高等専門学校 ← 対象者
- 9 専修学校
- 10 各種学校
- 11 学校教育支援機関

【その他の教育、学習支援業】

- 12 社会教育（公民館、図書館、博物館など）
- 13 職業・教育支援施設
- 14 学習塾
- 15 教養・技能教授業（各種教室・カルチャーセンター・フィットネスクラブなど）

16 他に分類されない教育・学習支援業

17 他に分類されない教育・学習支援業

<設問2=4、8の回答者の方のみお答えください>

設問3. あなたの職種を以下の中からお知らせください。(設問3の回答=)

1 校長・学長・園長

2 教頭・副校長

3 教員・講師 ← 対象者

4 事務職員

5 学校用務員

6 学校司書

7 その他

以下の質問項目には、上記設問1=19、設問2=4、8、設問3=3の方のみお答えください。

1: 先生のご経験から、「高校生として十分に成熟している」と思われる生徒（以後、「内面的成熟」と表記致します）とそうでない生徒がおられると思います。両者は、具体的にどこが、どのように、異なっているでしょうか。生徒の性格、気持ち、意識、態度、発言、表現、行動等について先生が思いつくことを教えて下さい。

①内面的に成熟をしている生徒は：

[]

②内面的に成熟をしていない生徒は：

[]

2: 「生徒の内面的成熟に影響すると思われる要因」には具体的に、どのようなものがあるでしょうか。学業（成績）、家庭環境、交友関係、部活、アルバイト、挫折経験、物事や経験の受け止め方（＝本人の認知構造）、他者からの支援、等々いろいろなものが考えられると思います。先生からみて重要だと思われることを理由をも添えて、3つ教えて下さい。

①	{		}
②	{		}
③	{		}

3：「逆境」という言葉があります。広辞苑では「思うようにならず苦勞の多い境遇」と説明しています。その様な意味で、高校生が遭遇する逆境には具体的にどのようなものがあるでしょうか。先生のご経験から思われたこと、感じたことを教えてください。

{		}
---	--	---

4：「逆境経験があったからこそ内面的成熟に至った」というふうに感じられる生徒に出会ったこともおありになると思います。そのようなタイプの生徒には、どのような特徴があるでしょうか。また、どのようにしてその逆境に立ち向かったのでしょうか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

① そのような生徒の「その特徴」は：

{		}
---	--	---

② その生徒の「逆境への対応・対処」は：

{		}
---	--	---

5:「教員の指導には良く従うが、内面的成熟は感じられない」というような生徒に出会ったこともおありだと思います。そのようなタイプの生徒には、どのような特徴があるでしょうか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

[]

6:「友だちの数は多いが、内面的成熟は感じられない」というような生徒に出会ったこともおありだと思います。そのようなタイプの生徒には、どのような特徴があるでしょうか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

[]

7:「学業成績には問題ないが、内面的成熟は感じられない」というような生徒に出会ったこともおありだと思います。そのようなタイプの生徒には、どのような特徴があるでしょうか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

[]

8:「内面的成熟をしていると思われた生徒が、急に停滞、混乱、退行などの状況に陥った」と感じられたこともおありかと思えます。どのようなことがキッカケとなり、その生徒は危機的な状況に陥ったと思えますか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

[]

9:「内面的成熟をしていないと思われていた生徒が急に成長した」と感じられたこともおありかと思えます。どのようなことがキッカケとなって、その生徒は急成長をしたのでしょうか。どんな些細なことでも良いので、先生の体験から思われたこと、感じたことを教えてください。

[]

10：先生の教員生活のなかで「内面的成熟が十分に感じられた生徒」を思い浮かべて下さい。その生徒が仮に山田太郎君であればY.Tといったように、以下の四角のなかにイニシャルをご記入下さい。そのイニシャルの生徒には、以下の1～30のそれぞれはどの程度あてはまりますか？

その生徒のイニシャル ⇨ ⇨ (1：男子生徒 2：女子生徒)

番号	「内面的成熟を感じられた生徒」	非常に当てはまる	かなり当てはまる	当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	その生徒さんは、校内ですれ違う大人には、見慣れぬ相手でもあいさつができる	○	○	○	○	○
2	その生徒さんは、クラブ活動に休むことなく参加し続けようとする	○	○	○	○	○
3	その生徒さんは、分からなかった内容は授業後に個別に質問をしにくる	○	○	○	○	○
4	その生徒さんは、周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる	○	○	○	○	○
5	その生徒さんは、自分の行動とその結果について責任を持つことができる	○	○	○	○	○
6	その生徒さんは、班やグループ等の集団をまとめることができる	○	○	○	○	○
7	その生徒さんは、アルバイトをしている	○	○	○	○	○
8	その生徒さんは、成長したいという意欲を持っている	○	○	○	○	○
9	その生徒さんは、各種検定や校外模試などに主体的にチャレンジする	○	○	○	○	○
10	その生徒さんは、社会の動向に広く関心を持っている	○	○	○	○	○
11	その生徒さんは、自分の考えを自分のことばで表現できる	○	○	○	○	○
12	その生徒さんは、授業をきちんと聴こうとする	○	○	○	○	○
13	その生徒さんは、上級生の指導に素直に従うことができる	○	○	○	○	○
14	その生徒さんは、身だしなみやおしゃれに気がつかっている	○	○	○	○	○
15	その生徒さんは、違反行為を見かけた場合は、その状況を教員に伝えようとする	○	○	○	○	○
16	その生徒さんは、クラス内の仕事や役割を率先して引き受けようとする	○	○	○	○	○
17	その生徒さんは、インターネット等を通じた直接知らない相手との情報交換は避ける	○	○	○	○	○
18	その生徒さんは、縁の下の力持ちのような目立たない役割でも着実に遂行できる	○	○	○	○	○
19	その生徒さんは、高校卒業後の進路に関して自分なりの目標を持っている	○	○	○	○	○
20	その生徒さんは、顧問やコーチに適切な言動で対応ができる	○	○	○	○	○
21	その生徒さんは、定期試験の勉強に一所懸命取り組もうとする	○	○	○	○	○
22	その生徒さんは、信頼しあえる友人がいる	○	○	○	○	○
23	その生徒さんは、下級生に対して優しく接することができる	○	○	○	○	○
24	その生徒さんは、校則や社会的なルールを守って行動ができる	○	○	○	○	○
25	その生徒さんは、学校行事に前向きに取り組もうとする	○	○	○	○	○
26	その生徒さんは、予習・復習をして授業に臨もうとする	○	○	○	○	○
27	その生徒さんは、ボランティア活動に主体的に参加しようとする	○	○	○	○	○
28	その生徒さんは、自分と考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる	○	○	○	○	○
29	その生徒さんは、異性の交際相手がいる	○	○	○	○	○
30	その生徒さんは、友だちや後輩などに勉強を教えてあげる	○	○	○	○	○

11：先生の教員生活のなかで「内面的成熟が感じられなかった生徒」を思い浮かべて下さい。その生徒が仮に鈴木次郎君であればS.Zといったように、以下の四角のなかにイニシャルをご記入下さい。そのイニシャルの生徒には、以下の1～30のそれぞれほどの程度あてはまりますか？

その生徒のイニシャル (1：男子生徒 2：女子生徒)

番号	「内面的成熟を感じられなかった生徒」	非常に当てはまる	かなり当てはまる	当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	その生徒さんは、校内ですれ違う大人には、見慣れぬ相手でもあいさつができる	○	○	○	○	○
2	その生徒さんは、クラブ活動に休むことなく参加し続けようとする	○	○	○	○	○
3	その生徒さんは、分からなかった内容は授業後に個別に質問をしにくる	○	○	○	○	○
4	その生徒さんは、周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる	○	○	○	○	○
5	その生徒さんは、自分の行動とその結果について責任を持つことができる	○	○	○	○	○
6	その生徒さんは、班やグループ等の集団をまとめることができる	○	○	○	○	○
7	その生徒さんは、アルバイトをしている	○	○	○	○	○
8	その生徒さんは、成長したいという意欲を持っている	○	○	○	○	○
9	その生徒さんは、各種検定や校外模試などに主体的にチャレンジする	○	○	○	○	○
10	その生徒さんは、社会の動向に広く関心を持っている	○	○	○	○	○
11	その生徒さんは、自分の考えを自分のことばで表現できる	○	○	○	○	○
12	その生徒さんは、授業をきちんと聴こうとする	○	○	○	○	○
13	その生徒さんは、上級生の指導に素直に従うことができる	○	○	○	○	○
14	その生徒さんは、身だしなみやおしゃれに気を付けている	○	○	○	○	○
15	その生徒さんは、違反行為を見かけた場合は、その状況を教員に伝えようとする	○	○	○	○	○
16	その生徒さんは、クラス内の仕事や役割を率先して引き受けようとする	○	○	○	○	○
17	その生徒さんは、インターネット等を通じた直接知らない相手との情報交換は避ける	○	○	○	○	○
18	その生徒さんは、縁の下の力持ちのような目立たない役割でも着実に遂行できる	○	○	○	○	○
19	その生徒さんは、高校卒業後の進路に関して自分なりの目標を持っている	○	○	○	○	○
20	その生徒さんは、顧問やコーチに適切な言動で対応ができる	○	○	○	○	○
21	その生徒さんは、定期試験の勉強に一所懸命取り組もうとする	○	○	○	○	○
22	その生徒さんは、信頼しあえる友人がいる	○	○	○	○	○
23	その生徒さんは、下級生に対して優しく接することができる	○	○	○	○	○
24	その生徒さんは、校則や社会的なルールを守って行動ができる	○	○	○	○	○
25	その生徒さんは、学校行事に前向きに取り組もうとする	○	○	○	○	○
26	その生徒さんは、予習・復習をして授業に臨もうとする	○	○	○	○	○
27	その生徒さんは、ボランティア活動に主体的に参加しようとする	○	○	○	○	○
28	その生徒さんは、自分と考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる	○	○	○	○	○
29	その生徒さんは、異性の交際相手がいる	○	○	○	○	○
30	その生徒さんは、友だちや後輩などに勉強を教えてあげる	○	○	○	○	○

12：以下のそれぞれは、「高校生の内面的成熟」にとって、どのくらい重要なものと先生はお考えでしょうか。お考えを教えてください。

番号	「高校生の内面的成熟にとっての重要度」	非常に重要	かなり重要	重要	あまり重要でない	重要でない
1	「校内ですれ違う大人には、見慣れぬ相手でもあいさつができる」ことは	○	○	○	○	○
2	「クラブ活動に休むことなく参加し続けようとする」ことは	○	○	○	○	○
3	「分からなかった内容は授業後に個別に質問をしにくる」ことは	○	○	○	○	○
4	「周囲からのアドバイスをしっかり受け止めることができる」ことは	○	○	○	○	○
5	「自分の行動とその結果について責任を持つことができる」ことは	○	○	○	○	○
6	「班やグループ等の集団をまとめることができる」ことは	○	○	○	○	○
7	「アルバイトをしている」ことは	○	○	○	○	○
8	「成長したいという意欲を持っている」ことは	○	○	○	○	○
9	「各種検定や校外模試などに主体的にチャレンジする」ことは	○	○	○	○	○
10	「社会の動向に広く関心を持っている」ことは	○	○	○	○	○
11	「自分の考えを自分のことばで表現できる」ことは	○	○	○	○	○
12	「授業をきちんと聴こうとする」ことは	○	○	○	○	○
13	「上級生の指導に素直に従うことができる」ことは	○	○	○	○	○
14	「身だしなみやおしゃれに気をつけている」ことは	○	○	○	○	○
15	「違反行為を見かけた場合は、その状況を教員に伝えようとする」ことは	○	○	○	○	○
16	「クラス内の仕事や役割を率先して引き受けようとする」ことは	○	○	○	○	○
17	「インターネット等を通じた直接知らない相手との情報交換は避ける」ことは	○	○	○	○	○
18	「縁の下の力持ちのような目立たない役割でも着実に遂行できる」ことは	○	○	○	○	○
19	「高校卒業後の進路に関して自分なりの目標を持っている」ことは	○	○	○	○	○
20	「顧問やコーチに適切な言動で対応ができる」ことは	○	○	○	○	○
21	「定期試験の勉強に一所懸命取り組もうとする」ことは	○	○	○	○	○
22	「信頼しあえる友人がいる」ことは	○	○	○	○	○
23	「下級生に対して優しく接することができる」ことは	○	○	○	○	○
24	「校則や社会的なルールを守って行動ができる」ことは	○	○	○	○	○
25	「学校行事に前向きに取り組もうとする」ことは	○	○	○	○	○
26	「予習・復習をして授業に臨もうとする」ことは	○	○	○	○	○
27	「ボランティア活動に主体的に参加しようとする」ことは	○	○	○	○	○
28	「自分と考え方の違う他者の存在を、客観的に受け止めることができる」ことは	○	○	○	○	○
29	「異性の交際相手がいる」ことは	○	○	○	○	○
30	「友だちや後輩などに勉強を教えてあげる」ことは	○	○	○	○	○

13 現在の勤務校について（該当する項目の文頭の括弧内に丸印をご記入ください）

- 高等学校 高等専門学校 高等専修学校
 全日制 定時制 通信制
 普通科 工業科 商業科 その他専門科
 国立 公立 私立
 男子校 女子校 共学校

14 教員経験

専任教員として (合計 年)
常勤講師として (合計 年)
非常勤講師として (合計 年)
上記のうち、クラス担任としての経験 (合計 年)

15 質問票調査結果（レポート）送付及び意見交換についてのご希望

本調査結果をレポートにまとめますが、希望される先生には質問票調査にご協力いただいたお礼としてレポートを無償で差し上げます。レポートを希望される場合は送付先をご記入ください。

なお、先生方への質問票調査結果の分析には現場の先生方のご意見が不可欠であると考えています。当プロジェクトと意見交換をご希望の方はその旨もご記入ください。後日、プロジェクトメンバーよりご連絡致します。

◎レポートを イ) 希望する ロ) 希望しない

◎意見交換を イ) 希望する ロ) 希望しない

◎送付先・連絡先：

お名前：

ご住所 〒 -

TEL - -

e-mail：

ご協力ありがとうございました。

「人材育成研究」論文投稿規程

2004年7月11日承認
2005年12月11日一部改定
2011年12月18日一部改定

■ 目的

機関誌「人材育成研究」は、学際的見地になつて、人材育成にかかわる研究論文等（研究論文・研究ノート）と研究論文等以外（展望・事例・資料・書評等）を掲載する。研究論文等以外の原稿については、編集委員会が執筆を依頼することがある。

■ 投稿資格

本学会員は、研究論文等および研究論文等以外の原稿を随時自由に投稿できる。（本学会員のうち、学部生会員については社会人会員の推薦を要する。）投稿原稿は未公刊のものに限る。

■ 投稿原稿の種類

投稿できる原稿の種類は、下記に分類され、投稿原稿の種類に応じて、原稿の構成と審査方針が異なる。

研究論文・研究ノート・展望・事例・資料・書評

■ 投稿方法

本学会事務局編集委員会宛て、投稿原稿を1部提出する。MS-Word または PDF 形式による原稿のEメールによる投稿も受け付ける。掲載決定後の最終原稿については、電子媒体による提出が求められる。投稿原稿は原則として返却しない。

■ 字数制限

投稿原稿の字数は、投稿原稿の種類を問わず、原則として24,000字以内とする。投稿原稿はワードプロセッサを用いて、A4版横書きで作成する。

■ 研究論文等原稿の構成

研究論文等は、表紙（表題・投稿者名・所属機関名を含む）、英文アブストラクト、本文、引用文献からなり、必要に応じて表と図を活用する。表紙には、表題・投稿者名・所属機関名を、和文と英文で記す。また、事前に専門家の

校閲を受けた100～200語の英文アブストラクト（英文要約）を必ずつける。本文は、常用漢字、現代かなづかい、算用数字を用い、簡潔かつ明確に記述する。以下に示した書式に従って引用文献をまとめ、必ず記載する。また、必要に応じて図表を添付する。ページ番号を、本文、引用文献、図表を通して振る。

■ 研究論文等以外の原稿の構成

研究論文等以外の原稿（展望・事例・資料・書評等）は、表紙（表題・英文タイトル・投稿者名・所属機関名を含む）、要約（200字程度）、本文、引用文献、図表、付録等からなる。表紙には、表題・投稿者名・所属機関名を記す。また、書評以外の原稿では、本文の内容を200字程度でまとめた要約をつける。本文は、常用漢字、現代かなづかい、算用数字を用い、簡潔かつ明確に記述する。引用文献は以下に示した書式に従ってまとめる。また、必要に応じて図表と付録を添付する。ページ番号を、本文、引用文献、図表、付録を通して振る。

■ 見出し

最上位の見出し（節見出し）は、1. 2. 3. の算用数字を用いて太字の横見出しを記す。以下の区切り（項見出し）については、必ず改行を行い、節、項を順に示す算用数字を用いて（たとえば、1.1、1.2など）太字の横見出しを記す。

■ 引用文献

引用文献は原稿の最後に一括し、原則として邦文献・洋文献を分けず、著者名のアルファベット順に並べる。引用文献の一覧に必要な書誌情報は以下のとおりとする。

邦書籍の場合：著者名（発行年）『書名』出版社名

洋書籍の場合：Author surname (s) , initials. (Year of publication) . Book title (in Italic) . Place of

publication: Publisher. (翻訳がある場合：翻訳者名『翻訳書名』出版社名 発行年)

邦論文の場合：執筆者名 (発行年)「論文名」『雑誌名』巻号, ページ.

洋論文の場合：Author surname (s) , initials. (Year of publication) . "Article title." Journal title (in Italic) , Volume, Pages.

■ 図表

図と表は、用紙1枚に1つずつ作成し、本文とは別にして、原稿の末尾に添付する。それぞれ図1、図2・・・、表1、表2・・・のように通し番号を振り、各図表に必ず表題をつける。投稿者自身が作成したもの以外の図表を掲載する場合には、図表の欄外に出典を必ず明記し、引用文献に必要な書誌情報を記載する。

■ 付録

付録の形式はとくに指定しない。ただし、印刷の都合や内容に応じて編集委員会が掲載の可否を決定する。

■ 論文審査

投稿された研究論文等の原稿は、編集委員会

が委嘱する審査者の審査結果に基づき、編集委員会が掲載の可否を決定する。投稿された研究論文等以外の原稿（展望・事例・資料・書評等）についても、編集委員会が掲載の可否を決定する。必要に応じて、原稿の改稿を依頼することがある。

■ コピーライト（著作権）

投稿原稿のコピーライト（著作権）は本学会に帰属する。

■ ISSN No.:1880-635X

■ 英文学会誌名：Japanese Journal of Human Resource Development

■ その他

その他については、編集委員会の申し合わせ事項に従う。

【投稿原稿送付先】

〒158-8630
東京都世田谷区等々力6-39-15
(学) 産業能率大学内
人材育成学会事務局「人材育成研究」編集委員会
Eメール：JAHRD@hj.sanno.ac.jp

「人材育成研究」編集委員会

石川 淳 (立教大学)
角山 剛 (東京未来大学)
木谷光宏 (明治大学)
宮下 清 (横浜市立大学)
永野 仁 (明治大学)
高橋 潔 (神戸大学)

「人材育成研究」

第7巻第1号

発行年月日 2012年3月31日
編集者 「人材育成研究」編集委員会
発行人 森田一寿
発行所 人材育成学会事務局
〒158-8630
東京都世田谷区等々力6-39-15
(学) 産業能率大学内
Tel:03-5758-5107
E-mail:JAHRD@hj.sanno.ac.jp
<http://www.jahrd.jp/>
印刷所 渡辺印刷株式会社
頒布価格 3,000円